

平成 29 年度 助成対象者研究報告書概要(一部紹介)

【保育所】

研究 の 種 類	研究テーマ・研究概要報告	研究者 (敬称略)
研究 A (自主 研究)	<p style="text-align: center;">保育所 1・2 歳児クラスにおける担当制保育のあり方についての一考察</p> <p>【研究課題・研究方法の概要】 保育所保育指針（2017）では 0～2 歳児の保育について、「応答的で受容的な保育者の関わり」が求められており、そのためのひとつの保育形態として担当制保育が考えられる。 本研究は、まず育児担当制とグループ担当制のふたつの方法について、その食事場面における保育者の援助に注目し、担当制の意義と課題を明らかにすることを目的とする。参与観察（各担当制保育の保育所 1・2 歳児クラス対象 1 クラス 3 回ずつ）と、保育者へのインタビューによって得られたデータをグラウンデッドセオリーアプローチ（木下，2003）の手法を用いて質的に分析し、2 種の担当制についてそれぞれの特性を考察する。</p> <p>【研究成果・考察の概要】 グループ担当制における保育者は、食べる量や食べ方に直接関連する援助を主に行っていた。一方育児担当制における保育者は、子どもを他児とつないだりクラス集団を意識したような援助が見られた。これは、担当児を発達段階や個人の生活リズムに応じて少人数ずつに分けて援助する方法が、ゆったりとした関わりや多面的な子ども理解を支えているものと考えられる。 また、両担当制ともに保育者と子どもの組み合わせが固定であるため、いつも同じメンバーで食卓を囲むことにより、保育者は子どもの個別対応や継続性のある援助を行っていた。このことは、担当制という保育形態が保育者と子どもの関わりを助け、安定した愛着関係の条件の 1 つである継続性・一貫性の法則（Bowlby, 1975）を守る一助となっていると言え、ここに担当制を実践する意義が明らかとなった。</p> <p>【残された課題・今後の展望】 担当制という保育形態を実践することが、保育者と子どもの安定した愛着関係の形成に寄与すると同時に、その実践方法によって、多面的な子ども理解や保育者の感性の質が左右されることが明らかとなった。担当制の実践方法を検討することは、現代の保育所の状況を鑑みると多くの園児を受け入れる中で、保育者の丁寧で細やかな関わりを保障するためのひとつの重要な視点である。 本研究では、両担当制における保育者の援助を、個々に質的に分析して行ったが、今後は分析の視点を精査した上で精緻な比較研究を行う必要がある。担当制は、1 つの保育形態である。保育形態とは、単なる外側から見られる子どもの活動形態ではなく、保育者側の保育理念を示すものである（梅田，2016）ため、保育の土台ともなり得る担当制について、そのあり方を実践の場からさらに検証していきたい。</p>	<p style="text-align: center;">福岡県</p> <p>学校法人 西南学院 早緑子供の園</p> <p style="text-align: center;">土田 珠紀</p>

【児童養護施設】

研究の種類	研究テーマ・研究概要報告	研究者 (敬称略)
研究A (自主研究)	<p style="text-align: center;">児童の性問題を適切に理解し、対応するためのツール開発</p> <p>【研究課題・研究方法の概要】 児童福祉施設では、施設内で起こりうる児童間の性暴力に対して、加害児童を措置変更する対症療法に終始してしまっているなど、十分に対応できていない現状がある。 研究会では、児童福祉施設における児童間の性暴力に対する、実践的・効果的な援助方法を模索している。 その初段階として、本研究では、児童福祉施設内の職員間における、「性意識の差」を研究課題とし、それを埋めるための研修ツール開発に向けた量的・質的調査を行った。 その方法は、児童福祉施設職員 90 名へのアンケートおよび先駆的实践をしている 2 施設へのインタビューを軸に行った。調査結果をもとに、研究会でのワークショップ実施や学会での研究発表と情報交換を行い、考察を行った。</p> <p>【研究成果・考察の概要】 アンケート調査では、児童福祉施設で働く職員の子どもに対する境界線の意識・性意識には、差があることが分かった。この差こそが、施設内で起こりうる「性暴力」への対応を難しくしている要因であると感じた。 先行事例のインタビュー調査では、職員間で共通認識をもって、性暴力に対応する援助モデルを実践していることが分かった。このことから、やはり職員の性意識の差を埋めるツールは、「話し合い」であり、支援方向性を定めていくためにも省くことのできない段階であると感じた。その研修モデルを開発し、研究会で実践をした。また、司法福祉学会での研究発表も行い、調査結果を報告することでさらに考察を深めることができた。</p> <p>【残された課題・今後の展望】 今回の研究では、児童福祉施設が、児童間の性暴力に対応するための土壌作りとして、必要なことが見えてきた。しかし、実際には、職員間の子どもに対する境界線・性意識の違いを共有するだけでは足りず、そこから一定の支援方針を定めていくことが必要である。そのためには、性暴力への予防(生活の見直し、個々のケースワーク、性教育のあり方)から始まり、性暴力が起きた際の対応についても施設として指針のようなものが必要である。 今後は、この研究を前段階として、児童間性暴力への包括的な援助モデルを開発していきたいと考える。</p>	<p>兵庫県</p> <p>社会福祉法人 三光事業団 児童養護施設 三光塾</p> <p>貝田 依子</p>

【母子生活支援施設】

研究の種類	研究テーマ・研究概要報告	研究者 (敬称略)
研究A (自主研究)	<p style="text-align: center;">母親の ACT 育児支援プログラム実践に関する研究</p> <p>【研究課題・研究方法の概要】</p> <p><研究課題> 本研究は ACT すこやか子育て講座を母子生活支援施設にて実施し、検証することを目的とする。</p> <p><研究方法></p> <p>①まず職員 10 名程度が ACT すこやか子育て講座を体験し学ぶ。研修後、良い点、課題を明らかにする。</p> <p>②母親向け ACT すこやか子育て講座を計画・実施する。</p> <p>③母親向け講座の実施後、質問紙と PSI 育児ストレスインデックス-SF を用いて、育児に関わるストレス検査を事前と事後で比較検討分析をする。</p> <p><倫理的配慮> 研究に伴い、プライバシーが特定されないように配慮する。</p> <p>【研究成果・考察の概要】</p> <p>1. 職員向けの ACT すこやか育児支援講座短縮版を計 4 回 8 時間を実施した。本講座の課題に関して共有することができ、ふりがなつきテキストの必要性、シングルマザー向けの刺激の少ない内容への変更を、職員のアドバイスをもとに準備できた。</p> <p>2. 親向けの実施報告： ・6名の参加申し込みを得られた。 ・5名が4分の3以上参加でき修了証が受理できた。 ・この講座を他者にすすめたいかとの質問に全参加者が勧めたいと答えた。 ・PSI-SFの結果：6例中4事例の育児ストレスが下がった。</p> <p><考察の概要> アセスメントや参加者情報が予め把握できている。生活の場であり地域の参加者よりも支援がきめ細かく即時対応できる。当プログラム実施後、母親に前向きな養育の姿勢が観察された。</p> <p>【残された課題・今後の展望】</p> <p><残された課題> ・今回施設内の中でクローズにて実施した。その安心感は得難いと考えられるが、第二弾の企画継続は予算がなければ外部講師を呼ぶことが困難である。就労中の母の群は参加がなかった。</p> <p><今後の展望> ・地域で実施し、当施設入所者が選択できることが望ましいと考えられる。 ・次年度は地域ケアプラザで開催し、地域の母親参加を募る。そこに当施設入所母が参加した場合に、どのような壁があるのかを考察し深めたい。</p>	<p>神奈川県</p> <p>社会福祉法人 たすけあいゆい 睦母子生活支援施設</p> <p>石川 宏江</p>

【乳児院】

研究 の 種 類	研究テーマ・研究概要報告	研究者 (敬称略)
研究 A (自主 研究)	<p style="text-align: center;">乳児院職員のやりがいを高めるチームの認識とは？ —チーム認識尺度の作成と検討—</p> <p>【研究課題・研究方法の概要】 新しい養育ビジョンが出され、乳児院における総合的支援が期待されている。乳児院が、今後多機能化などの新たな社会的要請に応えていくには、職員チームの協働が重要である。しかし、協働を促進する方法を探るための実証的研究は、非常に少ない。そこで職員がやりがいを高く持てるチームにするには、何が必要かを検討するため、「乳児院チーム認識尺度」「乳児院チームやりがい尺度」を作成し、質問紙による調査分析を行った。</p> <p>【研究成果・考察の概要】 乳児院職員チーム認識尺度は「効果的なコミュニケーション」「アクティブな協働」「主体的な学びあい」「ビジョンの共有」の4因子構造、乳児院やりがい尺度は一因子構造だった。分析の結果、乳児院職員チーム認識尺度4下位尺度すべてがやりがいと高く関連していた。 乳児院職員チーム認識尺度は、やりがいと関連するチームを評価、検討するための尺度となることが示唆された。</p> <p>【残された課題・今後の展望】 乳児院職員チーム認識尺度を用いて自施設のチームの特徴を評価することにより、やりがいを高く持てるチーム作りを各施設で検討することができる。 また、本尺度各下位尺度を、チームの一員として持つべき資質として捉え、人材育成プログラムに用いることができる。 今後は、本尺度を元にした実践研究や、支援の結果を測定する別の測度との関連の検討等を通して、乳児院職員のチーム認識と、実際の養育・支援の質との関連を検証したい。</p>	<p>神奈川県</p> <p>社会福祉法人 みその聖園ベ ビーホーム</p> <p>西田 英子</p>

【乳児院】

研究 の 種 類	研究テーマ・研究概要報告	研究者 (敬称略)
研究 B (自主 研究)	<p style="text-align: center;">児童福祉施設等里親支援機関の専門性を活かした 里親養育支援のあり方に関する研究</p> <hr/> <p>【研究課題・研究方法の概要】 近年、里親家庭に関わる職種が増え、役割が分業的になりがちで、専門性を活かした一貫性のある支援の積み重ねを困難にさせている。 二葉乳児院では、平成 17 年に東京都の事業を受託し、施設職員と共に乳幼児委託向けのテキスト作成に取り組んだ。 本研究では、その内容を再編し、各種関係機関の枠を超えて、現在および今後の里親支援を見据えた連携のあり方を議論・研究し、また、子どもの権利保障の観点、「子どもにとって」の視点を重視して整理を行い、成果物作成を試みたい。</p> <p>【研究成果・考察の概要】 本研究において、実際に里親子に関わりをもつ様々な職種が集まり、現状の課題を整理することで、支援の質の向上と、チームワーク形成を後押しするものとして、月 1 回の研究会を実施し、関係職員の参加していただき、子どもの視点で整理を行った。 成果物として、現在、1 冊のハンドブックを作成し、参加者へ配布を行った。また、10 月まで研究会を継続し、ハンドブック 2 の作成にあたっている。厚生労働省が掲げる包括的な里親支援機関としての施設の活用の検討と支援を支える一つとなると考える。</p> <p>【残された課題・今後の展望】 毎月開催の研究会および 2 回実施（3 月、9 月予定）の拡大研究会をとおして、現状の里親支援の課題整理をおこなっている。その内容も含め、ハンドブック 2 に取り組み、日常生活でのアドバイスを入れるため、乳児院等の他職種（医務、栄養士、家庭支援専門相談員 等）の専門知識も取り入れ、より具体的な内容となるように整理を行っている。また、この 2 冊のハンドブックを今後どのように利用して、職員および里親、地域関係職員の日々里親子支援に活用し展開できるかが課題である。</p>	<p>東京都</p> <p>社会福祉法人 二葉保育園 二葉乳児院</p> <p>長田 淳子</p>